

日高市で一番最初にできたニュータウン「日高団地」。このまちに暮らす人々の今をお届けします。

住め

日高

3



菊地さんご一家

高齢者が多いまちは、 子育て世代にやさしいまち。

3年ほど前に、大阪府からファミリーで転居してきたという菊地美貴さん。自然がちょうどよく残っている感じが、彼女の郷里である和歌山県にも似ていて、気に入っているといいます。転居の理由は、夫・怜男さんの仕事によるものだそうです。当時、長男の虹汰(こうた)くんは、ようやく5歳になったばかりの頃でした。「子どもを抱えながら馴染みがない場所に越してきて、戸惑う気持ちは少なからずありました」と美貴さん。でも、その不安な気持ちは直に和らいだといいます。



ご家族揃っての記念写真です。左から虹汰くん、怜男さん、海凧くん、美貴さん。



日高団地は比較的コンパクトな街で、幹線道路から引っ込んでいることから交通量が少ないため、徒歩による移動がしやすく、高齢者にとっては安全で暮らしやすいエリア。陽気がいい日には、あちこちで散歩する住民の姿を見かけます。そんなことから、菊地さん宅の前の道を飼い犬との散歩コースにしていた木藪佳子さんと、自宅の庭で遊んでいた虹汰くんが仲良くなります。「団地の皆さんは、気軽に声を掛けてくださるので、私たちがこの街に来たことを受け入れられている気がして…」と、この時のホッとした心境を美貴さんは話してくれました。

虹汰くんは、木藪おばあちゃんともとても気が合ったようで、慣れた頃には木藪さんの家へ遊びに行くように。さらにはそのお隣のおばあちゃんとも仲良くなり、世代を超えたお茶会に参加するようになったそうです。子どもが少ない地域ですから、このまちの住民が子どもの姿を見ると、声を掛けたくなくなってしまいう心情は、わかるような気がします。

もともと明るい性格の美貴さんですが、少し不安だった気持ちを元気にしてくれたのは、利発な虹汰くんだったのです。

当記事の取材者が菊地さん親子と出会ったのは、「みどりのサロン」で、ちぎり絵のワークショップの準備をしていた時のこと。その様子に関心を示してくれたのも、実は虹汰くんでした。こうしたフレンドリーな関係は大阪時代にもそれほどなかったようで、「この街から当分離れられないね」と、地域への愛着への気持ちを伝えてくれました。



■フリーペーパー「住め日高」1～4号を発行。

文化新聞の連載記事「のこしたい店・たのしみな店」における「スーパーみどりや」への取材をきっかけに、元気なシニアが活躍する日高団地に可能性を感じ、フリーペーパーを発行(取材執筆:いしいデザイン グラフィックデザイン:黒田デザイン事務所 / 日高団地自治会の協力のもと、日高団地全戸配布)。



仲良しの木藪おばあちゃんとツーショット。また、遊びにくるね。



取材当日は、ちぎり絵のワークショップを開催(いしいデザイン)。虹汰くんが「ふくろう」にチャレンジしてくれました。